



企業家精神

柴生田 晴四

(経済倶楽部理事長)

浅野財閥に対しての資金援助を決断しました。さらに、後にこの地区に高炉を建設することになる日本鋼管への出資も、継承者の反対を押し切って行いました。事業の成否を自らの目で判断し、いったん決断すればあえてリスクをとることを辞さない企業家精神がみとれるのです。

▼旧安田財閥の創始者である安田善次郎は、卓越した金銭感覚と将来性がないと判断した事業に対する厳しい姿勢から「しまり屋」と揶揄されました。しかし、自らが将来性を認めた事業に対しては支援を惜しみませんでした。後に日本有数の工業地帯に発展する京浜地区の埋め立て事業への支援もその一つです。この時、善次郎は自らの足で埋め立て予定地を歩いて実地調査をし、この事業を推進した

▼日本の近代国家としての発展は、まさにこうした企業家精神によって成し遂げられてきました。企業が事業活動を通じて獲得した利益を新たな成長分野に再投資し、金融機関が国民から集めた預金を有望分野に融資することで、国民経済は発展をしていくのです。お金を貯め込むだけで投資をしようとしぬい経営者は、企業家としての魂を失ったゾンビの

ような存在でしかありません。

▼市場の成熟や少子高齢化によって成長機会が失われつつあるといった退嬰的な議論もよく聞かれます。しかし、豊富な資金と蓄積された技術を生かすことのできる成長の機会はいくらでも見つけることができるはずで、社会の制約は社会の変化を生み出し、社会の変化は新たなニーズの温床となります。バブル崩壊後に起きた企業家精神の委縮こそが、内外の成長機会への投資をためらわせ、失われた20年と日本経済の衰退をもたらした元凶なのではないでしょうか。

▼重要なことは変化を恐れず、変化を自らの成長に結びつけようとする前向きな精神です。すでに存在する既存分野にしがみつくのでは

なく、社会の変化が生み出す新たな事業機会に向けて一歩を踏み出す勇氣が必要なのです。そして、その決断を下すのは経営陣です。もし成長戦略という政策が存在するとすれば、それはそうした決断を促し、背中を押すための環境整備でしょう。企業家は自らの責任においてリスクをとらなければなりません。国家がその替りをするにはできません。国家主導の経済がいかに悲惨な結果を招いたか。停滞する経済からの脱出が市場経済への転換によるものであったことは、新興国の発展が証明しています。沈み続ける日本経済の地位を回復させるためには、日本企業が企業家精神を取り戻し、経済活動を活性化させ、成長の原動力を回復させるしかありません。